

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓

——1995年夏の現地調査報告——

高田洋子

はじめに

チベット高原にはじまりインドシナ半島を貫通して南シナ海に注ぐメコン河は、下流域のカンボジア南部とベトナム南部に広大なデルタを擁している。両国の国境付近の小規模な山々を除くと、デルタの標高は4mを越えない。ベトナム側の面積だけでもそれは約26,300km²におよぶ。有史以前から、メコン河はゆっくりと現在の姿にその地表を形づくってきた。人間のデルタへの関わりは、デルタの生態的環境の変化とともにあり、またそれはデルタの自然を変化させる一因にもなった。

第2次世界大戦前のメコン・デルタでは、インドシナ半島のチャオプラヤ、イラワディー両デルタと並ぶ世界のコメの3大輸出地域として、稲作が大発展を遂げた。とりわけ20世紀初頭のメコン・デルタにおけるベトナム人の水田開拓は、フランス植民地政府による運河の掘削によって、コメの生産・輸出の拡大をもたらした。しかしその後のメコン・デルタは、フランスとの植民地独立闘争、ベトナム共和国軍と戦った共産主義革命闘争、アメリカとの反帝国主義戦争、そしてポル・ポト軍との国境戦争という戦乱に明け暮れるベトナム現代史の舞台となった。

本稿の第1の目的は、著者を含む研究チームが1995年夏に行ったベトナム南部メコン・デルタにおけるヒヤリング調査¹⁾をもとに、デルタの農業開拓最前線の現状を紹介することにある。

南北統一後のベトナム社会主義共和国政府は、集団農業から個別農家に生産を委託する農業へと、かつての穀倉地メコン・デルタの潜在的生産力

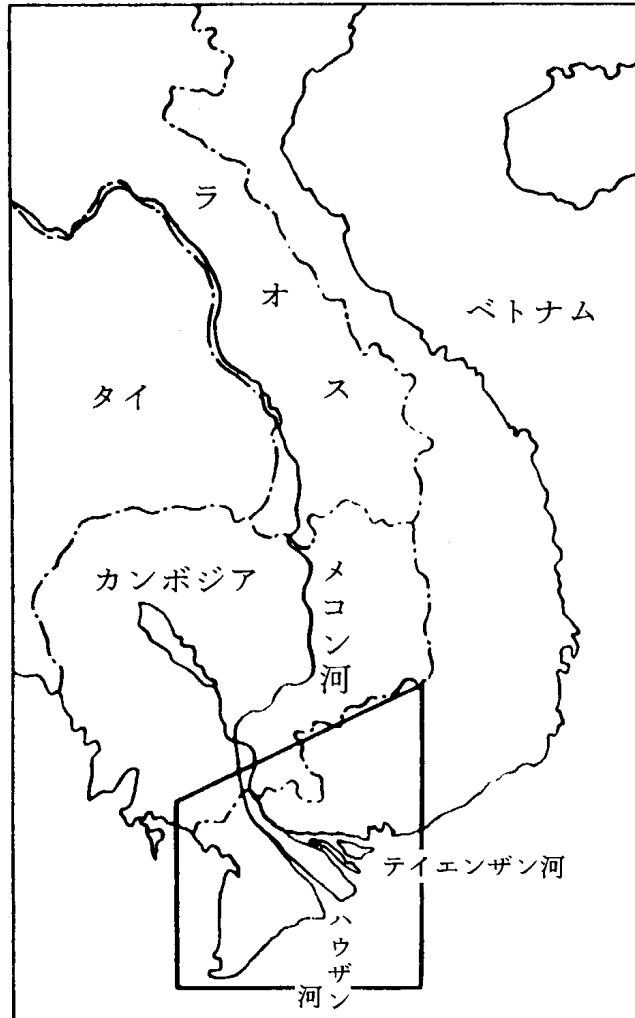


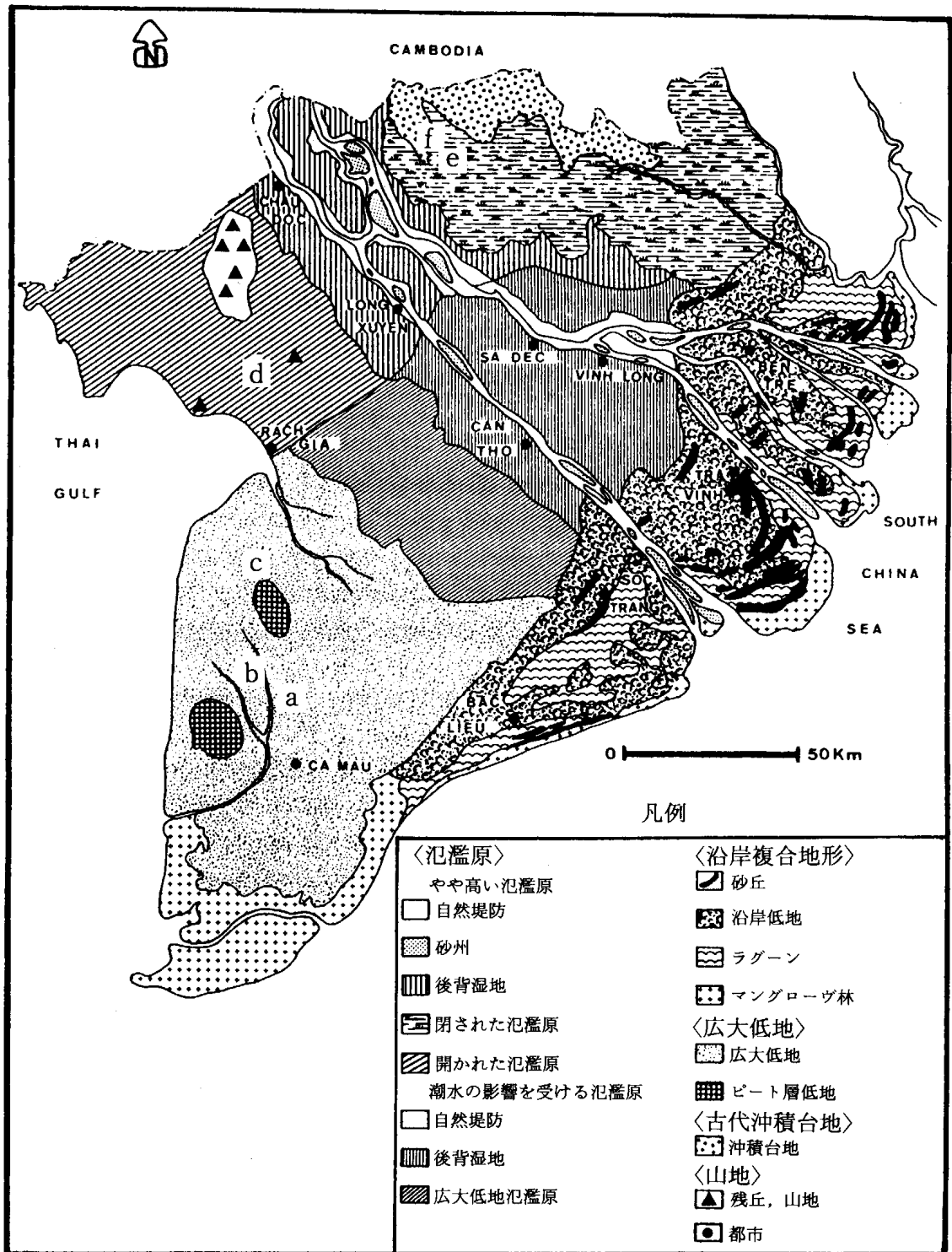
図1：インドシナ半島とメコンデルタ

を開発するための現実的な諸政策を模索しているように思われる。メコン・デルタは、ベトナム北部のコメ不足を補い、外貨獲得のための輸出米を生産する重要な地域と位置づけられている。本稿の第2のねらいとして、筆者は紹介した農業開拓の諸事例をこの100年間のメコン・デルタ開拓史のなかで分析し、歴史的視点よりデルタ開発の諸問題を考察する。

I. 1995年8月の現地調査

筆者は本年8月6日から19日までの14日間、メコン・デルタの農業開拓

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓



出所： [Nguyen Huu Chiem, 1993, p.161]

(筆者訳)

図2：メコンデルタの地形区分

史に関する研究の一環として、現地で農業開拓の現状を視察する機会を得た。²⁾ここにとりあげた調査地は、いずれもがインドシナ戦争もしくはベトナム戦争中に、激戦地であった地域である。初めに調査地 (a) から (f) の5カ所を、デルタの地形地図 (図2参照) で確認しておこう。まず、①カマウ半島「ウーミンの森」周辺の (a), (b), (c)。これらは、デルタ南西部の広大低地に含まれる。次に、②カンボジア国境に近い残丘周辺の (d)。雨季のハウザン河の水が自然堤防を越えて急激にあふれだし、シャム湾にながれこむ途中の氾濫原。最後に、③テイエンザン河左岸の「アンの平原」にある (e) と (f)。雨季にあふれるテイエンザン河の水が排水されないまま湿原の水位が上がる大氾濫原のなかの事例である。

1. ウーミンの森周辺における開発と環境保護計画

(1) ミンハイ省トイビン県の農業 (a)

カマウ Ca Mau 半島西部のウーミンの森は、第2次世界大戦前はメラルーカの原生林に覆われ、トラ、ワニ、ヘビなどの楽園であったといわれる。フランス植民地政府はこの森林地帯の木材伐採を禁じ、許可地域のみ天然資源の開発を認めた。フランス時代にカマウ・ウーミン地区への交通手段としては、いくつかの運河が建設された。³⁾主なものを挙げれば、まずラクザの街からカイロン Cai Lon 川をわたり、チェム川と結ぶカンガオ Can Gao 運河に入るルートがある。次にフンヒエップ Phung Hiep 運河もしくはバクリュー Bac Lieu 運河からカマウへ入り、チャックバン Chac Bang (タックトゥ Tac Thu) 川からチェム川を北上するルートなどである。フランス時代に、ウーミンの森に接する東部低地にはカイロン川の支流から直線運河が引かれ、周辺の水田開発が始まった。

私達は8月8日にカマウの街からエンジン付きの小舟を借り上げてチェム川をさかのぼり、ミンハイ省トイビン県を訪問した。トイビン Thoi

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓

BinhはキエンロンKien Longからウーミンの森にむかってのびた先の運河がチェム川と交差する地点、ウーミンの森の入り口に位置する町である。以下はトイビン県の人民委員会および農業局での聞き取りによる。

同県の人口は123,000、世帯数23,000戸（内農業が93%を占める）、総面積は72,995haである。県内のメラルーカ森林部は10,500ha、水田面積33,000ha、甘蔗畑10,000haとなっている。県全体は8村および県都1区に分かれている（図3参照）。

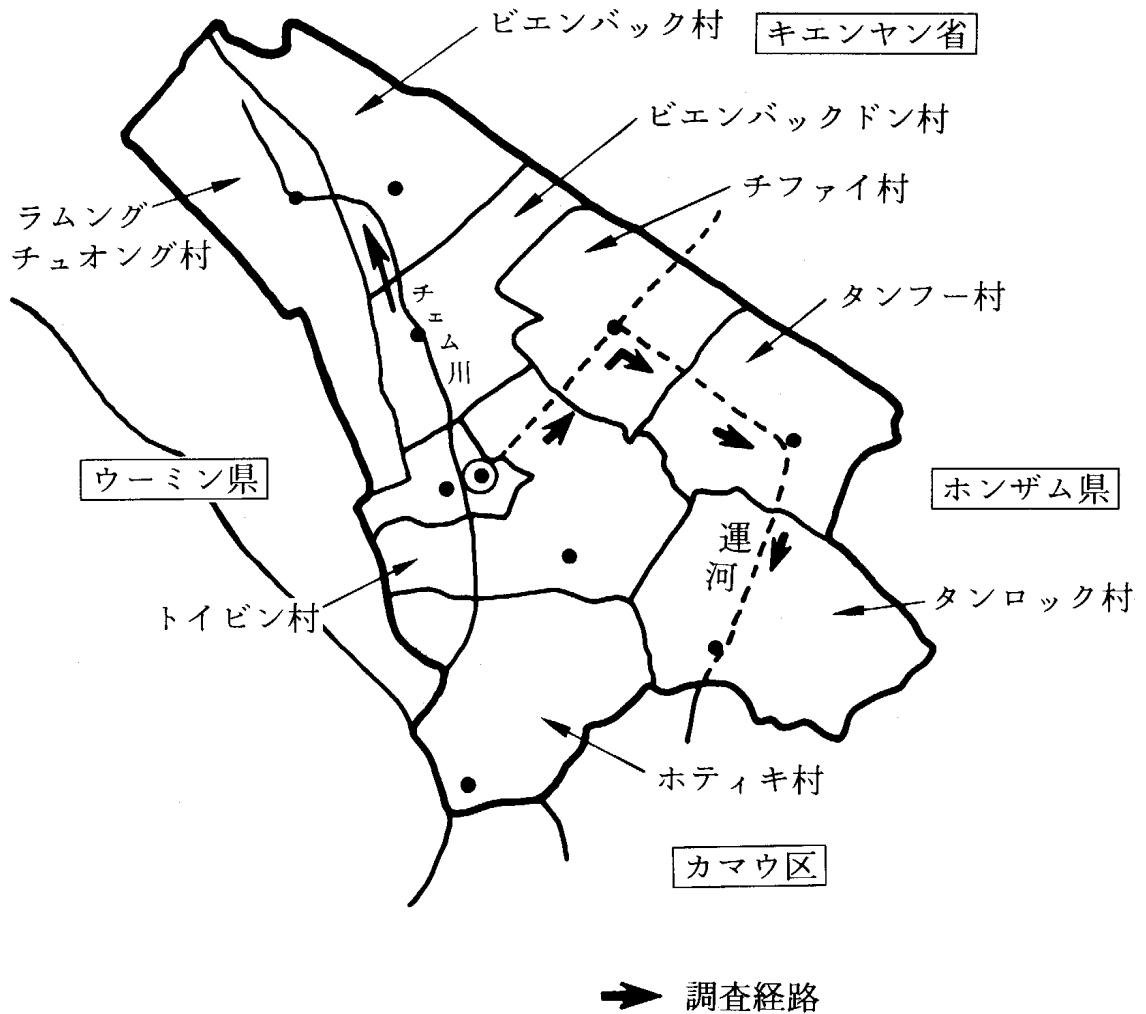


図3：ミンハイ省トイビン県の行政区

ウーミンの森側，県の北西部にあるラムングチュオング Lam ngu Troung村はベトナム戦争中は解放区だった。

トイビン区の北部に位置するビンバックドン Binh Back Dong村とチファイ Tri Phay村は土地がやや高い。この2村には，クメール人が多く住んでいる。これらの古い入植地では，水田と甘蔗栽培がさかんである。甘蔗は最近，パイナップルより収益率が高くなったことから耕作地がふえた。チファイ村には製糖工場があるそうだ。

私たちはさらにチョホイ Cho Hoi運河を小舟にのって北東へ向かい，チファイ村を通過してホンザン県方向に右折し，タンフー Tan Pho村ニャーマイ部落の水路沿いの農家を訪ねた。そこで71歳の老農婦（Trinh Van Thoさん）から興味深い入植時の話をきくことができた。彼女はヴィンロン Vinh Long省から1940年代前半に入植した。できたばかりの水路の周辺はヨシとメラルーカ林が少し生えていただけの土地だったそうである。フランス人が水牛（牛?）を飼育していた。移住してすぐに，ここは爆弾が落ちる危険区域になった。彼女は同省からやってきた開拓農民と結婚し，この地に定住した。彼らの田は水路から6km入ったところにあり，大地主の所有地であった。そのあたり一帯が当時は，3人の不在大地主の所有地であったという。彼女の話から推測すれば，第2次世界大戦後ここはベトナムの解放区となった可能性が強いであろう。

タンフー地域は低地の酸性土壌を雨季の雨水で洗い出し，運河に排水することによって農業生産が可能となった。彼女の一家は現在2haの耕地に米二期作，そして甘蔗も栽培している。

トイビン県の南部つまりカマウの北東部に接する低地には，タンロック Tan Loc村（ホンザン Hon Dan県境）がある。ここでは1980年代半ばからあらたに水路建設が活発に行われている。これらの水路沿いの農家は，最近，エビ養殖に挑戦している。エビ農家は3カ月の養殖期に7,000万ドン（1ドンは約108円）を稼ぐことができた。平均的なベトナム農民をはるか

にしのご収入である。しかし、昨年には養殖池の汚染のために生産不能となった者も多くいるという。⁴⁾

新しい水路からさらに小水路を掘って入植中の農民は、ベトナム人に限らずクメール人、中国系もいるそうだ。タンフー村、タンロック村、ホーティキHo Ti KY村にはソックSocと名がつく地名が多い。それはクメール人の集落を示している。1部落は100戸から200戸の農家集団から構成されている。トイビン県には3つのクメール寺院が存在する。

(2) ラムングチュオング (Lam ngu Truong) 省営農場 (ミンハイ省) (b)

トイビンからチェム河を4km程北上し、川に直角に掘られた第18水路にはいる。私たちはウーミンの森のかつての解放区につくられた省営農場を見学した。農場内に入植したビエンバック Bien Bach村の第18部落のタイチュングコン (Thai Trung Cong) さんの話を聞いた。

ラムングチュオング農場は、省政府が1990年から10年間の計画において、戦争で破壊されたメラルーカ森林を再生させ、入植事業を推進する農場である。1995年までに入植した農家には、水路に沿って幅100m、奥行き1000m(面積10ha)の土地が与えられる。省政府と開拓者の間には次のような契約事項が定められている。提供された土地の1haは、自由な耕作が許される。残りはメラルーカの苗を植林する。開拓者には育った林の50%の伐採権が認められるが、10年間は伐採してはならない。伐採後は再び植林を義務づけられる。1haの自留地には、VAC運動に基づき、米のほか果樹・野菜、養魚、養豚・養鶏などの多角経営が奨励されている。耕地としての土地の整備がいまだに不十分なために、彼の水田は伝統品種の一期作である。このあたりの土地は潮水の浸入はない。雨季のはじめの雨を待って耕作を開始する。果樹はグアバ、パパイヤ、バナナが、野菜はナス、キャッサバが植えられていた。

コンさんは、1975年からしばらくカマウで国営製薬会社の副工場長を務

めた。カマウ半島先端のナムカン (Nam Can) でエビ養殖業も政府の推薦でやってみたが、1993年にゴックヒエン (Ngoc Hien) 村からここに移住した。彼は特別に20haを分与されて入植した。そしてその後に、隣の入植失敗者から10haを買い上げて30haの土地使用権者となった。毎年一回、農業税を1ha当たり50kgの米で支払う。また水産税として所有地1haあたり6kgの魚 (60,000ドン相当) を支払う。

水路は排水と交通手段として大切である。各水路は農場のセンターが管理し、水路毎に25戸の農家が一つの自治組織をつくる。コンさんは第18番部落長であった。

(3) ウーミン歴史遺跡天然保護林区 (キエンヤン Kien Giang 省) (c)

キエンヤン省とミンハイ省の省境の森林地帯 (ウーミンの森北部) では、ベトナム戦争中の絶え間ない爆撃と枯れ葉剤の大量散布によって、メラルーカの原生林は多大の破壊を被った。しかも戦後に入るや、農民の不法入植によって乱開発が続いた結果、ついに自然林は消滅しヨシの原野に変貌したという。革命戦争の輝かしい勝利を導いたゲリラの拠点を歴史遺跡として保存するために、森をよみがえらせる計画が進められている。

私たちはラクザの街を南にぬけてラックソイ Rach Soi 県側の渡し場で船を待った。そしてカイベ川の河口をこえてカイロン川をさかのぼり、キエンアン Kien An に向かった。眼前のシャム湾では、最近タイ漁船の海域侵犯をめぐってタイ側との緊張状態が発生したそうである。海上警備隊のポリスが目についた。このあたりはベトナム戦争中の激戦地である。川を隔てて両勢力の大砲の打ち合いが、連日続いたそうである。

川を渡りカンガオ運河沿いの道を進むと、左岸に立派なクメール寺院が建っている。アンビエン An Bien の町である。やがて左折して第7水路にはいった。土手には大木が生い茂り、入植の古さと人間生活の落ちつきを感じさせる。カンガオ運河は、文献に依れば仏領期にカイロン川とチェム

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓

川を結ぶ水路として1930年代に建設されている。第7水路の先がファーム・ステーションである。

目的地の管理事務所に着くと、計画図（図4）をもとにこの開拓事業の説明がなされた。事業計画は1985年以降に立案され、1992年から計画地区内部の水路建設が実施された。まず総面積13,000haの荒野を囲むように外

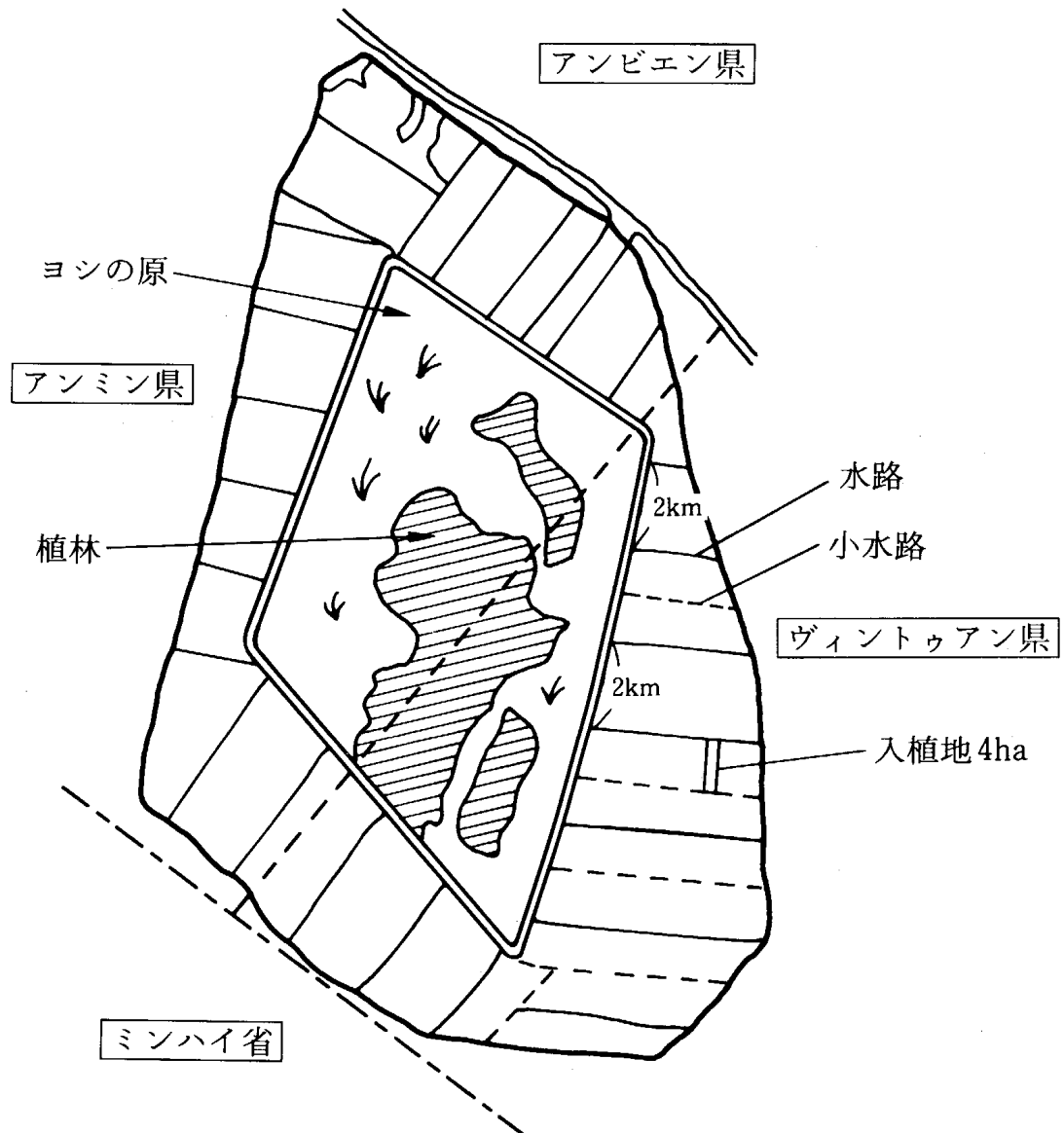


図4：ウーミン歴史遺跡天然保護林区の計画図

側の水路が掘削された。内部の最も低い中心部にメラルーカ林区をつくる。中心部を囲む水路と外側の水路の間に2km感覚の小水路が掘削された。これらの水路に沿って4haの土地が入植者に分配された。

周辺地域も含めて計画では6,000家族を入植させる予定だ。しかしいままでのところ、キエンヤン省が支援した入植組は2700戸である。総面積13,000ha。ほとんどは計画地に接する3県（Vinh Thuan, An Bien, An Minh）の出身者である。南に接するミンハイ省からも300戸が入植した。入植の斡旋は、土地使用権2ha以下の保持者と土地なし層に限定している。使用权をまったく持たない人が最も優先されるという。現在、水田の70%は2期作、30%は伝統種の1期作であるという。

1992年8月にここから10kmほど離れたヴィントウアン県ミンテイオン（Minh Ty Ong）村から入植した農民のフィンヴィンコー（Hinh Vinh Co）さん（34歳）にインタビューした。かれの父は零細な土地（0.7-0.8ha）耕作者で子どもが多かったので、コーさんは土地をわけてもらえず農業労働者として働いていた。ヴィントウアンは、仏領期の資料によれば、チェム川運河ぞいの比較的古い開拓地である。戦後50年の間に土地は人口増加によって飽和状態となったことが推測される。彼は希望者の中から優先的に入植の権利を得、妻と二人の子ども、家族4人で移り住んだ。初めに2haが提供されたが、その後に近くに水路が掘られ残りの面積分も与えられた。しかし建設された水路が設計通りではなかったため、それは3.5haだった。役場からはこの他に、入植当初の3カ月分の開拓資金として40万ドンが支給された。また翌年にはもう一度40万ドンが供与された。税金は当面免除されている。

彼らは入植後1993年冬から水田耕作を開始し、在来伝統品種のイネを栽培した。つくったコメは自家消費の他、買い取り商人に売却する。農繁期の補充労働力は近隣のグループで労働交換して済みます。自分ができなければ、金銭で支払う。トラクターの借り賃は0.1haあたり20万ベトナムドン

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓

である。さらに季節毎にやってくる日雇い労働者を雇用する場合もある。刈り取りの時期であったので、私達は水路脇につくられた彼らの仮り住まいの小屋を実際に見ることができた。

ただし、供与された3.5haのうち彼が自由に耕作できるのは1haである。のこり2.5haは、メラルーカを植林する義務がある。そのための費用は1haあたり、50万ドンを支給される。植林義務については、彼は不満に思っているようであった。

コーさんが土地を配分された同じ水路沿いには、102戸の農家が配置された。入植者には、同村出身者も多い。彼は副業として、喫茶店を兼ねた日用品を扱う万屋を開いている。市場はここから4kmはなれているらしい。

雨季にはさらにあと50cm程水位が上がるけれど、乾季には地割れが起こり水は不足する。そこで必要な飲料水は井戸水を使う。省政府が提供する井戸水は水質が悪いので、井戸もちの農民の家から買っているそうだ。政府が計画している開拓部落の小学校はまだ建設されていない。

2. キエンヤン省ホンダット県における国営農場 (d)

私たちは8月15日に、デルタ北西部の残丘群周辺低地の開拓地を視察した。それは、キエンヤン省ホンダット県ミーラム村に隣接する国営農場である。この農場は1977年以後、つまりベトナム戦争後に、共産党政府が北部の人々を動員して模範的な社会主義農場の建設を試みた集団開拓の一例である。

私達はラクザの街を北にぬけて、ハテイエン運河ぞいをホンダット方向に走り、バテー (Ba The) 運河の南の運河にはいる渡し場をめざした。定期便の船着き場や船大工の工場がハテイエン運河に面して見える。第3橋 (Cau so 3) の渡し場からチャーターした小舟に乗った。渡し場の喫茶店

の隣の家にマリヤ像が飾ってあるのが気になる。このあたりはカトリック教徒たちの入植地ではないだろうかという思いが一瞬よぎった。

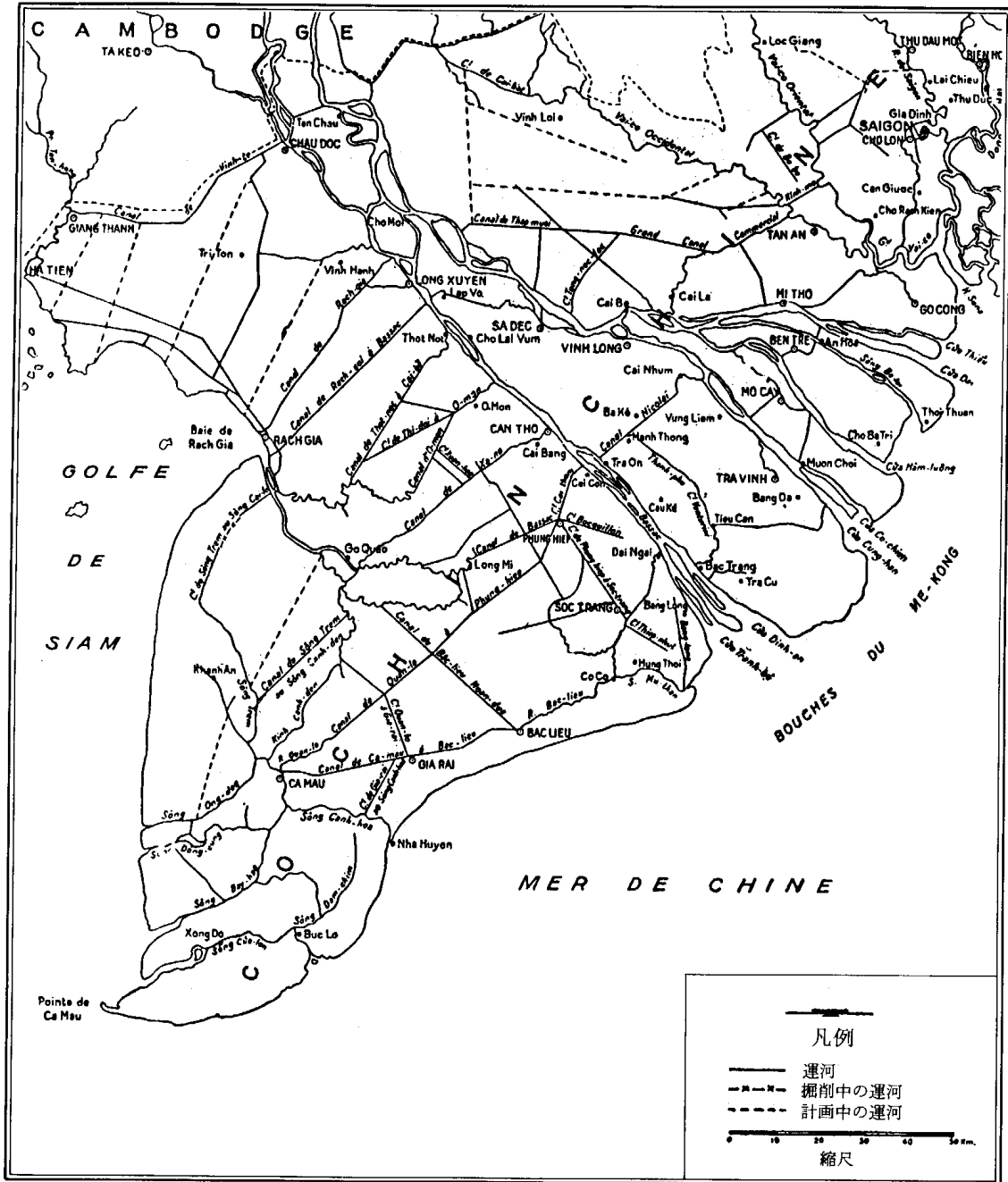
キエンハオ（Kien Hao）運河の土手には、ユーカリの並木、また時にはメラルーカの植林も見える。ユーカリの小さな苗を箱に積んだ舟にも出会う。北東に向かって進むにつれ、臨時労働者の一家らしい小舟に何艘もすれちがった。舟は彼らのささやかな衣食住のすべてを積んでいる。舳先に置かれた七輪の上に煤のついた鍋が見える。

やがて兩岸の木がなくなり泥の土手が続くようになる頃、前方左手のかなたに山々が見える。仏領時代に「7人の姉妹」と呼ばれたデルタに浮かぶ残丘群である。地図で確認すると標高145mのものから710mの山までである。フランス時代にはクメール人の多く住む「7人の姉妹」から南に広がる周辺低地は、雨季の浸水がひどく、開発はほとんどなされなかった。但し当時すでに、チャウドックからホンダット方面のハティエン運河にぬける交通路としてチトン運河が掘削された。チトン運河の両側に並行に走るソーモット、バテー両運河の掘削工事も1930年代半ばに計画され仏領期に完成した（図5参照）。

国营農場は、バテー運河の南に平行に掘削されたキエンハオ（Kien Hao）運河沿いに立地していた。運河の左岸から北西直角に掘られた第1水路から750mごとに、入植地が並ぶ。第14水路までの間に6つの生産グループ（Doi）が、組織されている。これ全体が美林^{ミーラム}国营農場（Doanh Nghiep Nong Truong My Lam）であった。農場長のヴィエンハオ（Vien Hao, 61歳）氏の他、幹部2人、また初期の入植当時を知る人にも話を聞いた。次にその内容を要約する。

農場の周囲はベトナム戦争中の激戦地である。1972年から1975年までの枯れ葉剤散布によって、メラルーカ林はすっかり破壊された。戦後に、国家はこれらの荒れ地を、新経済区と国营農場、および軍の所有地に定め開拓事業を推進した。

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓



出所： [Agard, 1934, p.277]

図 5：フランス植民地時代の主要航行運河

政府の主導で1977年に青年開拓先鋒隊の第1グループが、ベトナム北部紅河デルタのタイビン省から入植した。18歳から35歳までの男女540人が、3年間の契約でやってきた。グループは5つの生産隊(To)に再編成された。同省のタイトウイ(Thai Thui)県の出身者が多く、グループ内で結婚して定住した人もいる。政府は当初、南部ベトナムのキエンヤン省には北部ベトナムのタイビン⁵⁾省から、そして先にみたミンハイ省には北部のナムデイン省からそれぞれ人々を移住させる方針を持っていたようだ。

入植の初期には、政府の開拓資金援助が頼りであった。米づくりは、この土地に合った浮き稲の栽培を知るまで、大変に苦労したという。

1980年には第2グループとして、北部ベトナムのハソンビン(Ha Son Binh)省からの約200家族が入植した。年老いた親を伴う40歳代の人が目だった。その後も北部からの入植は続き、ほぼ半数が定着したらしい。

初期の国営農場の建設に幹部として携わったチュオンザンハオ(Truong Dang Hao)さん(62歳)は、フエの漁村で生まれ、ジュネーヴ協定後の1954年にゲアンに向かった、いわゆる集結組の一人である。彼は1977年までゲアン省の国営農場の会計課で働いた。44歳の時に、この農場設立のための13人の幹部の一人として入植した。

彼は農場の土地は入植者の数に対して十分に広く、食料不足になったことはないと述べた。現在、農場の全戸数は462戸(1,612人)、農場総面積1,500ha、その内農地は1,100haである。編成された6グループは、各グループが約75農家(約300人ずつ)から成っている。平均すると農場の各農家は、約2.38haの農地の使用が可能である。農繁期の労働力は、ロンスエン、チャウドック、ヴィンロンからの臨時雇いの労働者に依存している。例えば、ここへくるまでの水路ですれ違った小舟の農家であろう。また各農家は農場管理費として、毎年1haあたり90kgの粃を農場に支払う。それは、各ドイ毎に、グループ長の責任において集められる。農家の土地所有権には契約期間が伴う。期間がおわると、農場側との新規契約によって生

産性のより高い土地に代えてもらうこともできる。

最後のドイ、つまり6番目のグループはカンボジア戦争終了後に軍隊改革の一環として、帰還兵士に土地が提供された時に編成された。近隣の南部出身者が農場の入植者になるのはまれで、1988年4月の「10号決議」（Ⅱ-2-(2)で説明）が決定された後には、北部ベトナムの故郷から親族を呼ぶケースがでてきているという。

実は私達は、土地使用权の分与すなわち「10号決議」後に生じたミーラム農場をめぐる興味深い問題を知ることができた。10号決議が実施に移された際に、一般に農家は長期におよぶ平均2haの土地使用权を手にいれ、生産単位として認められることになった。実質的には土地の私有権に近い自由な使用权である。この時、国营農場では生産農家に資金を貸し出して彼らに土地（使用权）を分配した。ところが、農場周辺から、国营農場建設以前の元の土地所有者が、自らの権利を主張して、争議となったのである。農場長によれば、このもめごとは、元の所有者であった地域住民と国家の問題として処理され、農場内には混乱はなかったそうだ。ただし農場は周辺の村落、例えばミーラム（My Lam）村、ソック（Soc）村、ミーヒェップソン（My Hiep Son）村、タンラップ（Tan Lap）部落に対してかなりの規模の土地を返還したもようである。

農場建設の歴史の古いDoi 1、Doi 2、Doi 3が北側に隣接する地域は、若い幹部によれば、1954年以降のカトリック教徒入植地であったらしい。今でもカトリック教徒は多く住み、最近1986年にはタンラップ部落に教会が再建された。とすると、建設当初の国营農場は未踏の荒地を開墾したというより、解放前の彼らの土地権を事実上接收し、人口稠密な北部からの植民を強行した国家事業であった可能性がある。それは、メコン・デルタ開拓の歴史にたえずつきまとう戦争の影、また政治的に不安定な開発過程の一端を思い起こさせるのである。

3. ドンタップ平原の開拓農家

一方私たちは、テイエンザン河左岸の閉ざされた大湿原地帯の開拓地で、メコン・デルタ水田開発の原点と見ることでできる風景に出会った。それは、筆者の中に今でも強烈な印象を残している。

フランス植民地期には、この湿原の南に大運河 Grand Canal Commercial がつくられた (図 5 参照)。1993年の夏に、筆者はこの運河を遡って タップムオイの町に行った。途中の開拓地はヤシやビンロウ樹、バナナ、竹その他の多種類の樹木が運河を縁どり、水田には雨季 2 期目のイネが育っていた⁶⁾。1995年の夏、私たちが訪れたのはその遙か北方、ドンタップ省 タムノン Tam Nong 県の開拓地である。そこには、タップムオイとは全く異なるメコン・デルタ氾濫原の世界があった。仏領期の行政区で言えば、テイエンザン河とハウザン河をはさんで両がわに広がるロンスエン省のテイエンザン河左岸の一部であった。19世紀の反仏ゲリラの潜伏地として恐れられ、フランス期には「アシの平原」と呼ばれた人跡未踏の原野である。

カンボジア国境を越えてベトナム領に入ったテイエンザン河は、雨季には河水を自然堤防のむこうに一挙に押し出し、西ヴァムコ河までの広大な窪地を一面の大湖に変えてしまう。20世紀初頭になって自然堤防に沿った傾斜地、いわゆる後背湿地には、増水に応じて茎が伸長する浮き稲栽培が普及し、水田面積は急増した。しかしその先の窪地は排水困難なために浸水後の稲作は全く不可能だったばかりか、乾季も強酸性の土壌によって作物栽培はできなかった。そのために、開拓事業はほとんど放棄されたのである。その後の抗仏・抗米の両戦争中は、この地域は常に解放勢力側の領域に属した。

訪問したタムノン県の規模は総面積44,533ha、人口74,000人である。県内にはテイエンザン河からの浸水を西ヴァムコ河に流すドンテイエン

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓

(Dong Tien) 大幹線運河をはじめカンビン (Kan Binh), カザム (Ca Dam), ムオイタイ (Muoi Tay) などの運河, およびそれらを相互に繋ぐ第2次水路が掘削された (図6)。7村と公営の植林区, 自然保護区, そして国営農場が誕生している。開拓の歴史はドウティエン運河沿いのテイエンザン河に近い西側から順に, 1955年頃から徐々に進んでいたといわれる。今回の調査では, 同県の新しい入植地フーズック (Phu Duc) 村とフーヒエップ (Phu Hiep) 村の2村を視察することになった。

役所の説明によれば, 今年の夏秋米の作付面積は県全体で, 14,160ha だった。また畑地も178haほどある。畑はらっきょう, さとうきび, すいかなどが栽培されるデルタの微高地である。同県の農業課に掲げられた計画達成表によれば, 畑地は, フーヒエップ村に多い。大昔のメコン・デルタの砂州⁷⁾が今では沿海から遠くはなれたドンタップムオイに残っているわけだ。あとのインタビューにもあるように, こうした微高地は新しい入植者

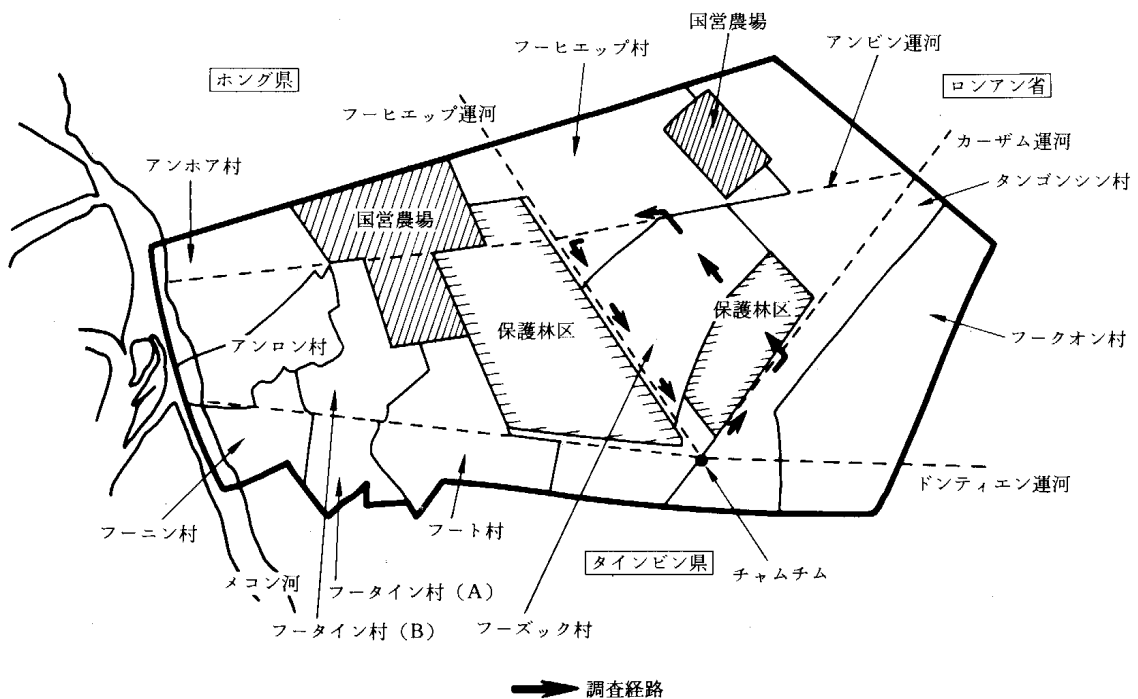


図6：ドンタップ省タムノン県の行政区

ではなく、地元の人々の利用地になっている。水田のほとんどは、冬春米（乾季米）と作期の短い夏秋米の2期作である。

(1) フーズック村の新しい入植者 (e)

同県の中心チャムチュムから舟でカザン (Ca Dam) 運河（これも1975年以前からある運河）に入り、左折して森林保護区をぬけるとフーズック村である。北東方向は水路と同じ水位まで増水して海のように広がる氾濫原が、地平線の彼方までつづいている。空と水を区切るのは緑の細長い帯である。一方、水路の左岸にはほりあげたばかりの草一本ない泥の土手が現れ、その上にメコン・デルタで一般的なニッパヤシの農家が、間隔をあけて建っている。

未亡人のフインチチュオック (Huynh Thi Truoc) さんはその土手で日用品の小店を経営している。商品はきわめて少ないが、驚いたことに34度の炎天下にもかかわらず、蓋のない箱に入った粳がらに売りものの氷が保管されている。最も新しい入植地のひとつであるここには、勿論電気はきていない。彼女は1991年に、クーロン省ロンホ県からこのタップドアン (Tap doan) 部落に移住した。昨年の水害を尋ねると、水は家の柱1mの高さまで上がったそうだ。入植した91年にも洪水があったという。新しい開拓地ほど災害の被害に脆いことを、思いしらされる。⁸⁾

彼女は入植するとき、1haの土地所有権を金5chi(当時1Chiは20万ドン。100万ドン相当)でフーズック村の人から買った。この安い土地を紹介したのは当時クーロン省ヴィンロンの役所である。現在、金は値上がりして2.5倍の価格(1chiは50万ドン)に高騰したという。ヴィンロンにある土地は上の息子に譲ってきた。この地に移住した米商人の弟が近くに住んでいるから何かと安心だそうだ。

1km程先の場所にある彼女の土地は請負農家に任せてある。冬春米は1haあたり6トン、夏秋米は4トンの収量がある。請負には収穫を折半し

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓

て支払う。農繁期は季節労働者を雇い、水牛やトラクターも賃貸である。農業税は土地の生産性に従って異なる。彼女は保有地のうちの0.5haは21kg/0.1haの割で、また残りの半分0.5haは28kg/0.1haの割で米を納める(245kg)。水利税は0.1haあたり50kgを支払う。乾季の水は酸性なのでフーズック運河から真水をポンプ灌漑をしている。ポンプの所有者が田圃まで小水路を掘って、取水してくれる。収量から生産経費と税金を差し引いたものが彼女の収入だ。

水上生活者の屋形舟と釣具を乗せた小舟が、土手の下に留めてある。彼女の店の隣に、チャウドック Chau doc 省ヴィンハウ Vinh Hau 県からきたブーヴァンドル Bui Van Dol さん(31歳)一家が仮住まい中である。彼は刈り取りの頃にここにやってきて農業労働者として働く。つづいて増水して田圃が漁場になると、漁をして生計をたてる。フーズック村に来るのは今年で2年目である。ドルさんの父の土地はわずかしかないために、彼は土地を相続させてもらうことができない。

どこの漁場でも自由に漁ができる。田の中にまっすぐに網をはり、魚を捕獲する。増水のピーク時にはたくさんの魚がとれる。魚商人が毎日買い付けにやってきて、生きたままのなまずを売買する。1kgあたり13,000ドンで取り引きするが、たぶんカイロンの街では40,000ドンはするだろう。豊漁すぎても買い取り価格は半値まで下がってしまう。

(2) フーヒエップ村の成功者 (f)

私達は再び舟に戻り、ルンバン (Lung Bang) 運河を北西に進み、カンビン運河との交差点を左折して第10部落の土手に上がった。畑のらっきょうの収穫作業が行われていた。水位の上がり方が早いので、大きさはまだ不十分だが収穫を急いでいた。採れたてのらっきょうを次々に束ねていたのは、子供達の集団だった。

20m程先の竹とニッパでつくられた高床式の家を訪問した。家主のブイ

ヴァンミン (Bui Van Minh) さんは、アンヤン省チャウフー県から1988年にここにやってきた。両親は零細な土地所有者である。以前から彼は漁師としてこのあたりで働いたこともあり、広々とした土地が気に入っていた。土地の分配の話友達に聞いて、フーヒエップ村役場にさっそく2haの使用権を申請した。出身地であるチャウフー県の役所から彼が土地使用権の所持者でないことを証明する書類を交付してもらい、ここに入植できることが正式に決まるまで、6カ月かかった。そのあいだ彼は漁をして生活することができた。

彼によれば、戦争中このあたりは危険地帯だった。戦後に漁に訪れるようになったときはメラルーカの林や茅釣り草の原が一面の水の中に島のように見えた。砂地では冬春米や野菜が栽培された。それらは地元民の利用地で、新しい入植者はその土地の使用権を得ることはできなかった。入植地ははじめは水深が高すぎて在来種も浮き稲も栽培不能の土地であったが、水路が掘られる毎に少しずつ生産地がふえた。

1988年の土地法施行後、すぐに対応した彼は運がよかった。他にも彼の村から15家族が入植を希望したが、土地の確保が間に合わなかったり、ここでの農業に失敗してこの地を去っていった。2週間ほど前に彼は6.5haの土地権登記をすませた。分散的所有である。経営規模の拡大が、目下の彼の夢である。ドンタップでは10haが農家の最大経済規模だという。このあたりの土地は広大なので、役所も2haの法的制限を適用しないらしい。

入植した時、彼は1.5haの耕作から始めたが、89年の夏秋作のコメづくりは失敗した。小さなネズミの大群に被害を受けたからだ。フランス時代の毎年の省別作柄報告書の中に、ネズミや昆虫の被害の大きさを記したものがあったことを思い出す。現在、彼の水田は1haあたり約6トンを産す。勤勉で向上心に富むこの一家は、雨季の漁業で得た稼ぎを貯金して、トラクター、ポンプ (小舟、灌漑両用エンジン付き)、テレビ、ラジカセを所有している。高床の下の地面に、ひよこやあひるが飼育され、家のそばには

養豚のための小屋も建設中だ。

ミンさん一家に別れを告げ、小舟でチャムチムへの帰路に着く。フーヒエップ運河の両岸は、竹の並木で覆われている。入植の歴史が比較的古い証拠である。緑陰の向こうに、多種類の植物に囲まれた家々、水路で洗濯するひと、光の中で語り合うおんなたち、微高地の真っ白い墓、自転車の小道、井戸、たたずむ老人の姿などが見えかくれする。厳しい自然環境の中のさまざまな新しい入植地を見て来たばかりの筆者の眼には、人が住み着き月日が積み重ねられることの意味が、この時初めて実感された。

以上は、今夏に実施した調査の一部分に過ぎない。この他に、調査隊はデルタ開発史におけるクメール民族、中国人移民の諸問題を考察する手がかりを得るために、チャヴィン省の各地も視察した。さらに、開発過程で現れる現地人大地主の実態を明らかにするために、かつての大土地所有者の親族を探してインタビューを行い、彼らの足跡を調査した。いくつかの点においてこれまでの認識を変更せざるを得ない貴重な事実とも出会った。それらは、近いうちに別の形で発表したい。

Ⅱ．メコン・デルタ農業開拓の歴史と現在

では、次にⅠでみた開拓最前線の現状をメコン・デルタ開拓史のなかで考察することにした。

1. デルタ開発の歴史過程

(1) キン族⁹⁾のフロンティアとしてのメコン・デルタ

キン族の南下、いわゆる「南進」が南部地方に国策として推進されたのは、文献によれば17世紀末以降のことである。元来、コーチシナ Cochinchina の地名は、広東語の Cao zhi のムラユ語 Kuchi に由来するとい

う。マレー人がインドの Kuchi と区別してベトナムの Kuchi という意味で、Kuchi-China と呼ぶのを、ヨーロッパ人が Cochinchina と記した¹⁰⁾。17世紀末のベトナム資料によれば、現在のチャヴィンやハウザン河下流の西部地域には広東系の中国人移民が住んでいたとする記録もある¹¹⁾。現カンボジア国境に近いシャム湾側のハティエンにも、集団移住した中国人 Mac 氏が拠点築いた。

南北分裂時代（17、18世紀）の南のベトナム人（グエン家）の拠点は、ベトナム中部のフエにあった。当時のメコン河の河口は、カンボジア（クメール人）の領域である。とはいえ、先住民族クメール人のデルタ開拓に関する研究は、管見の限りではほとんどなされていない。したがって現状では、ベトナム側の視点から記述されたフロンティアとしてのメコン・デルタをイメージするしかない。

19世紀初頭に、長い間分裂と戦乱の続いたベトナムは統一され、ほぼ現在の領域を版図とする越南国が樹立された。国の都は北部のハノイから中部のフエに移され、ベトナム人の南部への入植と水田開拓は活発化した。ベトナム南部メコン・デルタ地方は、19世紀前半すなわちフランス直轄支配を被る以前から余剰米の生産地として知られていた。この頃すでに南部は中部に向けた食料の供給地であったばかりか、その産出米は中国や諸外国へも密かに流出した。余剰米の統制をめざした阮朝政府は、南部で横行する米とアヘンの密貿易の取締に手を焼いたのである。

(2) フランス植民地支配期の開発

1867年にフランスは、メコンデルタを含むベトナム南部を植民地コーチシナとして支配下におくと、すぐに米の輸出を解禁した。平定のための軍政期が終わると、植民地経営を支える主力輸出農産品であった米の増産に力が注がれた。旺盛な開拓意欲をもったベトナム人入植者は、植民地体制の中でフロンティアを稲穂の実る土地に変えていった。デルタの砂丘列上

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓

に住んだクメール人は開発ブームに取り残され、中国人の子孫はベトナム化して植民地体制に組み込まれた。¹²⁾

広大な輸出米生産地域となるハウザン河の西、すなわちトランス・バサック地域の開発は、20世紀初頭にフランス植民地政府が推進した幹線運河の建設を皮切りに本格化した。その結果、入植地までの水上交通路が確保された上、排水機能により可耕地を産むことになった大運河沿いに、農民は入植を開始し、小水路を自ら縦横に掘って開墾に励んだ。メコン・デルタの生態的要因から、開発の初期に、排水機能をもつ大規模な水利施設が建設されることは不可欠である。

しかし、植民地時代の水田面積の拡大は、1920年代後半のブーム期をピークに、その後は停滞を続けた。まずそれは、1920年代末の経済恐慌に端を発した。米の流通を牛耳る華僑の信用恐慌と世界恐慌の二重の影響の下、米価は暴落し、デルタの米の集荷は大混乱に陥ったのである。¹³⁾ しかも、開発の進行と共に醸成されていた小農民の不満は、この時一挙に火を吹いた。幹線運河に沿った土地の分配に当たり、フランス植民地政府は申請者に有償の土地分配を行った。土地を大規模に取得したのは、実際にはデルタには不在の植民地役人や本国のフランス人、そして開発資金を持つ一部のベトナム人であった。¹⁴⁾ 法的所有者（大地主）に対する耕作者（小作人）の社会的不平等感は、植民地体制の変革運動に発展する。

この頃から、デルタの農村社会には、新興宗教集団の武装化（カオダイ、ホアハオなど）と小農民の人頭税・地代の不払い闘争（主として共産主義者の主導した運動）が頻発した。¹⁵⁾ 不況の打撃から立ち直った後も、41年からは日本軍によるベトナム南部への進駐、45年の8月革命、そしてインドシナ戦争と続く激動の時代を通して、農業生産は停滞を余儀なくされたのである。

先のトイビン県タンフー村の71歳になる老農婦の話を、思い出していただきたい。彼女の開拓地は、フランス時代の末期に運河が掘削されたデル

タの水田地帯の最縁辺部に位置する。彼女によればその運河周辺地域一帯は、3人の不在大地主の所有地だった。そのうちの一人はフランス人であったという。運河に沿って入植した彼らは、そこから6kmの奥地に自分たちで水路を掘り進んで小作地を開拓した。小水路の掘削が、先の調査地ラムグチュオング農場およびウーミン歴史遺跡天然保護林区の開拓地にみられたように、農民個人が行う開拓作業であるのは、今も当時も変わっていないようだ。入植してまもなく、解放勢力の根拠地ウーミンの森に近いタンフー村は、植民地軍とゲリラの激しい戦闘に巻き込まれた。爆弾が降ってきたその当時のことを、彼女はよく覚えていた。

第2次世界大戦後8年間続くフランスとのインドシナ戦争中、メコン・デルタの西部およびアンの平原部には広領域のベトナム解放区が生まれた。ドゴール主義にかたむくフランスは、インドシナ植民地体制の復活を強く望んでコーチシナ奪還をめざした。独立戦争が始まる前、1946年3月3日におけるフランス・ベトナム協定の締結後も、またホーチミンがフォンテーヌブローで戦争回避のための交渉をおこなっている間でさえ、メコン・デルタでの激しい戦闘は続いていたのである。

(3) 戦時下のメコン・デルタ

ジュネーヴ協定が結ばれる直前の1953-54年とベトナム戦争中の1967年で、デルタの勢力配置図を比較すると、その情勢はあまり変わらなかった。¹⁶⁾ フランスもしくはベトナム共和国政府とその同盟者（カオダイ、ホアハオ、カトリック、ビンスウエン・マフィアなど）が支配区とする都市部とテイエンザン、ハウザン両河沿いの地域に対して、抵抗勢力側のUBK (Uy Ban Khang Chien Hanh Chinh = ホーチミン政府支持)の解放区はドンタップ湿原やウーミンの森周辺に広がっていた。戦争中、米の輸出は激減したが、米作地はゲリラの食糧基地となった。抵抗勢力側は、都市部に逃げた大地主の土地を小農民へ分配することによって農民の支持を獲得し、

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓

解放区を拡大した。52万人以上の土地なし農民や貧農に分配された土地は56万ヘクタールにおよんだといわれる。¹⁷⁾ 他方、インドシナ戦争末期のフランス側の統計によれば、1953年のコーチシナの籾生産は第2次世界大戦前の70%に落ち込んだ。¹⁸⁾

その後南ベトナムのゴードンディエム政権時代に、80万人に近い難民が、17度線以北から南へ移住したことは知られている。その9割は、カトリック教徒であった。彼らの多くは、現ホーチミン市の北東部ドンナイ地方に移住した。また、抵抗戦争で荒廃し耕作放棄地の多く存在したメコン・デルタにも、政府は難民キャンプを設置した。その入植地の一つに、現アンヤン、キエンヤン両省にまたがるラックソイ運河沿いの低湿地、カイサンCai Sanがある。77,000haの土地に180kmの運河を縦横に掘削して、100,000人を送り込む政府計画は、しかしその半分も達成できなかったといわれている。¹⁹⁾ 私達は偶然にもキエンヤン省ホンダット県のミーラム国营農場周辺に、移住したカトリック教徒たちの開拓地が存在していたことを発見したのである。

さらに、ベトナム戦争末期には、荒廃した激戦地の農業復興と政治的統合の目的を兼ねて、南ベトナム政府は「土地を耕作者の手に Land to the tiller」政策を実施した。1970年から1972年までの間に、南ベトナム政府は、アメリカの援助を受けて地主の土地を有償で買い上げ、100万haの土地を80万人に分配した。土地所有農民となった人々は、高収量米の新品種を積極的に導入し、生産を増大させた。²⁰⁾ アメリカの資金援助は化学肥料、農薬の入手も可能にし、これによってカントーやミトー周辺では米の2期作が普及した。

2. 社会主義体制下のメコン・デルタ農業とドイモイ政策

(1) 集団化政策の失敗

ベトナム戦争が終わり、南北統一を達成したベトナム社会主義共和国政府は、当初は10年間で南の資本主義経済を北ベトナムの経済制度に統合するつもりであった。しかし、この方針はすぐ変更され、メコン・デルタにおいても、性急な社会主義農業への転換がめざされた。1977年8月には南部の各地に集団農場を実験的に設立することが決まり、78年1月から開始された。つづいて1978年12月には「南部農村における資本主義的搾取形態の徹底的排除と土地調整の促進に関する政府閣議決定」が出され、農民の階級区分が試みられた。²¹⁾

しかし、デルタの農民は容易に集団化にはなじまなかった。1980年までにメコン・デルタで集団化された農家は全体の9%、耕地の7%に過ぎない。²²⁾ その要因は、一つには、独立闘争を勝ち抜いた南部農民の自負心が集団化の強制を受け入れなかったことにあるだろう。そしてそれ以上に、先に述べたように、統一以前の南ベトナム政府支配区において念願の自作農化は達成されて、多くの農民自らが生産向上の力量を蓄えつつあった。この現実には、集団化の政策が沿わなかったのである。

それどころか、生産・流通・社会諸制度の混乱、カンボジア戦争の影響、自然災害などのマイナス要因が重なって、国内の農業生産および経済状況は悪化した。ベトナム国内は1970年代末に、まさに危機的どん底状況にあった。²³⁾ 中越戦争そして大量のボートピープル現象が発生したのは、この頃であった。

共産党政府は社会主義の理想を遠い将来の目標に棚上げして、差し迫った状況を建て直すための現実的路線を選択せざるを得なかった。1981年からの「新経済政策」は、農業に関していえば、政府の農産物買い上げ価格の大幅引き上げと農家への生産物請負制度の導入によって、成果を上げた。とはいえ、政府の集団化政策への固執はその後も続き、南部農業は依然として停滞しつづけた。しかしこの状況は、1986年12月のベトナム共産党第6回大会でのドイモイ政策の採択によって、大きく転換する。

(2) 第10号決議の実施

農業におけるドイモイ政策の具体的方針は、1988年4月の「農業経済管理の刷新に関する政治局会議」第10号決議に示された。現在のデルタにおける農家経営を考察するにはその重大な転換を、熟知する必要がある。10号決議は、それまでの農業集団化政策を中断もしくは後退させる方向を示している。そして、市場経済の役割をみとめて個人農を自主的な経済単位として認めたこと、また能力主義および専門化の方向に沿って労働を再編成しようとしている点が大きな変化である。

さらに、土地所有権は国家に属するけれども、各農家が開墾・造成し、長期にわたり使用している土地はその農家に使用権が与えられるべきだとする重要な変更点加わった。しかもその委託期間は、5年から15年になった。農民はそれを土地私有権の復活とも捉えた。また、75年の解放後に実施された土地調整で土地所有権の移転に不満をもってきた人々は、土地の返還要求をかかげるようになった。²⁴⁾ともあれその成果として、1980年代末のメコン・デルタの米の生産は増大し、ついにベトナムを再び世界の米輸出国第3位に押し上げたのである。私たちは、調査したすべての開拓地で、10号決議の内容と深く関係する話を耳にした。

10号決議はまず、既存の国営組織の見直しをもとめた。1977年に設立されたキエンヤン省ミーラム集団農場では、88年以降に幹部が各地の国営農場を訪問して生産性および生産システム改善の努力をしたが、結局、規模の縮小に追いこまれた。つまり、土地返還の抗議に押し寄せた周辺の元の土地所有農民へ、農場の土地の一部を返していた。また農場内の各メンバーに土地の使用権をあたえ、生産を委ねた。国営とはいえ、幹部による計画にもとづいた生産管理はすでにきわめて小さな範囲にしかおよばなくなっていた。ミーラム集団農場の将来は、明るくない。

ウーミンの森の省営農場に入植したコン氏は、現在も部落長をつとめるやり手である。入植時の規定は10haの土地分与であるが、彼は積極的に土

地の規模拡大をはかり、すでに30haを経営しようとしていた。南部では、1農家あたりの土地所有権は2haが基本である。保有地には植林義務がある上、10年後にしか伐採権は認められないという制限付きではあるが、そこには生産力向上のための能力主義を打ちだした10号決議の影響を見ることが出来る。あるいは、党員のその地位による有利な土地取得のケースと捉えるべきなのであろうか？

ドンタップ省フーズック村のチュオックさんが、同村の土地所有権者から金5chiを支払って1haの開拓地を取得した話は、興味深い。真新しい開拓地の土地所有権を自らの私有財産のごとく他人に売買することは、違法であったはずだ。しかし現実には、それが公然と行われていたのである。しかも商店主の彼女は実際にはコメづくりに携わることもなく、請負人に耕作を任せている。それは息子の将来を考えた彼女のたくましい生き方なのかもしれない。

同省フンヒエップ村のミンさんが経験した土地所有権獲得競争の話は、チャンスをつかんだ好運な農民のケースとしてさらに興味深い。勤勉かつ積極的に時代の変化に対応していく農民像を、彼の中に感じとることができた。ドイモイ政策がさらに続く限り、彼の一家の将来は暗くなるはずがない。

10号決議が実施されて約7年が経過した。個々人の才覚に任せた農業経営が、いずれ格差の問題を産むのは不可避のことだろう。²⁵⁾しかし、大きな矛盾をはらみながらも、広大な未耕地の存在するデルタの開拓はもっと先に進まなくてはならないのである。

小結：メコン・デルタ開拓をめぐる視点

最後に、考察してきたデルタの開拓過程と調査した開拓者の事例を参考にしながら、メコン・デルタ開拓を3つの観点から論じたい。3つの観点

とは、土地、技術・資本、労働力のそれぞれの局面である。

i) 土地

第2次世界大戦前に開墾地の先取権がみとめられて自作農民層が形成されたとされるチャオプラヤ・デルタと異なり、20世紀メコン・デルタの開発過程では、土地権の分配において、フランス植民地政府の土地政策が深刻な階級対立を生み出したことは重要である。メコン・デルタの農民の開拓者土地先取権は、1880年代に所有地の登記を義務づける土地政策が実施された時を最後に、以後少なくとも法的には認可されなかった。フランス支配末期の社会不安、そして戦後のデルタにおける権力闘争の起源は、フランス時代の土地政策の失敗に由来すると筆者は考えている。

土地権をどのように農民に付与するかは、現在のベトナム政府の抱える大きな問題でもある。これまでの開拓地の農民の諸例からも明らかなように、労働に対する意欲を引き出し、メコンデルタに現在も存在する広大な土地の開拓を促すには、耕作する土地が農民のものであることがやはり必要なのである。

ii) 技術・資本

デルタの開拓にまず不可欠なものは、運河の建設であった。フランス植民地政府が近代的技術と資本をもって掘削した幹線運河は、90年以上を経た現在でもメコン・デルタ西部開発の要として役立っていた。現在の中央・地方政府とも1980年代半ば以降は、積極的に運河掘削と維持管理の為の定期的浚渫に力を入れている。運河の建設は、村、県、省の行政レベルをこえて、いくつかの省もしくは中央政府の下でなされる必要がある。結局、それは資本と技術を組織的に行使できる大きな権力によるしかない。

運河が建設された後、実際の開墾に携わるのは個々の農民である。政府と農民の間に、中間組織が介在する必要度は低い。開拓農民は運河を掘り

上げた兩岸の土手の上に、リボン状に住居をつくっている。そして、運河に吐き出す排水路を自力で掘り進む。現在は排水用の小型ポンプ（運搬用の小舟のエンジンにも脱穀用にも兼用できる）一つあれば、作業はさらに容易になった。浸水地を水田化する作業が集団で行われることに、必然性はないのである。村の寄り合いや祭の空間は、どこにも見あたらない。このことから明らかなように、たとえば北部の村落にみられるような水利管理を中核とした村落共同体なるものは、メコン・デルタ社会の中心的問題にはならない。

iii) 労働力

個々の農民が主体となる開拓の過程で、問題となるのは労働力をいかに調達するかである。フランス期には、広大な西部デルタの潜在力に対してベトナム南部が人口希薄な地域であったために、労働力不足が開発のボトルネックとされた。北部の紅河デルタの過剰人口地帯から労働力を集団的に投入する計画が実施されたこともある。すでに歴史過程のなかで述べてきたように、ベトナム人のフロンティアとして南部が意識されて以来、為政者が南部へ移民を送り込む政策を試みなかった時代はない。

調査した開拓地の例を参考にすると、入植者の出身地は次の三つのタイプに分類できる。①ごく近接する農業過剰人口地域からのタイプ（ウーミン歴史遺跡天然保護林区のケースにみられた近接する3県の例）、②ベトナム人入植の歴史の古いメコン河流域の地方都市周辺からのタイプ（ミンハイ省トイビン県タンフー村の老農婦、およびドンタップ省の新開地2村の入植者の例）、③ベトナム北部紅河デルタの人口稠密な諸省からのタイプ（キエンヤン省ホンダット県のミーラム国営農場へのタイビン省からの集団入植の例）、である。

政策上の観点からはこれらを効率的に組織管理することが大事であるが、歴史家としてもヒントを得ることができた。フランス植民地時代のメ

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓

メコン・デルタ開拓を考察する上で、当時の入植の実態、すなわち人の移動、開拓社会の形成過程について、これまでほとんど解明されていないからである。

開拓と労働力を考察する上で、もう一つ重要な点は農業労働者の問題である。今回の現地調査を通して、筆者はデルタの稲作に農繁期の臨時農業労働者が不可欠の要素である点を確認する事ができた。入植の歴史が古く、条件の整ったところでは高収量品種米の導入によって2期作は勿論、3期作をおこなっている所もある。新開地であっても2haの水田耕作ともなると必ず臨時労働者を雇用している。ヒヤリングで明らかになったように、農業労働者の雇用はどこでも慣行的に行われていた。どこから、誰が、どのように移動して労働力を提供するのかが実態の分析が必要である。北部の指導者がこのような現象を教条主義的に否定的現象であると捉えるのが正しいか否か、じっくり調査する必要がある。メコン・デルタに合った効率的な農業システムを構築するためには、この問題は避けて通れない課題であると筆者には思われる。

注記：突然の、また時には不躰なインタビューにもかかわらず、農作業の手を休めて、遠来の研究者たちに快く応じて下さったメコン・デルタの開拓者の方々に、この場を借りて心から感謝の意を表します。

注 1) 本調査は、平成7年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究）〔研究テーマ：メコンデルタの農業開拓の史的研究〕研究代表者；高田洋子（千葉敬愛短期大学）によるものである。今夏の調査チームは、筆者の他、グエン・フー・チェム（土壌学・カントー大学農学部）、中村圭三（地理学・本学教授）、田中耕司（作物学・京都大学東南アジア研究センター助教授）、河野泰之（水理工学・京都大学東南アジア研究センター助手）、大野美紀子（ホーチミン市総合大学歴史学科研究生）、今村宣勝（在ホーチミン日本国総領事館専門調査員）の7人で構成した。ベトナム側の受け入れ機関は、ハウザン河に臨むメコン・デルタの中心部カントー市の国立カントー大学農学部にお願いした。

- 2) 私達の調査チームは、事前にデルタ各省の関係部局に紹介状と調査内容を提出し、当局の許可を得て現地にはいることを許された。従来、外国人によるベトナム国内調査には厳しい制限があり、許可令はきわめて稀れであった。最近の対外開放政策のおかげで、日本人を中心とした研究チームにこのようなチャンスを与えていただいたことに対して、関係各機関に深く感謝する。とりわけ私達の研究プロジェクトの意義を認め、御力添えをいただいたカントー大学副学長ボー・トン・スアン博士（現ベトナム国会議員）に心から感謝の意を表したい。なおヒヤリングは英語・ベトナム語・日本語などを介して行った。聞き取り内容に誤りがあれば、それは筆者が負うものである。
- 3) [Agard, 1935, p.276-279] 参照。
- 4) 最近のミンハイ省南部のエビ養殖業については、[高田, 1994-a] を参照されたい。
- 5) 紅河の左岸河口部デルタに位置する、典型的な人口稠密地帯。トンキン湾に面した沿岸低地のタイビン輪中のなかにある。フランス時代には隣のナムダイン省と並び、コーチシナのゴム農園やフランス領太平洋諸島（ニューカレドニア、ヌーメアなど）の開発地へ、多くの契約労働者を出した。
- 6) [高田, 1994-a] にその時の叙述があるので参照されたい。
- 7) フランス植民者は、このようなデルタの微高地をジオン（Giong）と呼んだ。アシの平原のなかのジオンについては、[Bouault, 1930, p.4] を参照されたい。
- 8) チャムチムの農業課の役人によれば、昨年の洪水の被害は甚大で、タンノム県全体の雨季作米の収量は例年の30%にもみたなかったそうである。
- 9) 現在のベトナム人口の約8割を占めるベト族のこと。
- 10) [Li Tana & A. Reid (eds), 1993. pp.2-3]
- 11) [Ibid., p.54]
- 12) [高田, 1984-a] を参照。
- 13) 「高田, 1991」は、フランス植民地期の中国人移民に対する統治政策を分析したものである。コメの輸出経済が活発化するとともに、地方のコメ仲買人や都市部の商工業で働く南中国からの移民は急増し、フランス植民地政府は出身地グループごとに各コミュニティーを統制した。南部において、コメの流通および精米部門をほぼ独占したのは華僑である。彼らなくして、フランスのコーチシナ植民地経営は成り立たなかった。また、コメ輸出政策を分析してフランスの植民地支配の特徴を考察したものとして [高田, 1995] がある。
- 14) [高田, 1984-b] および [高田, 1994-b] がある。
- 15) [Brocheux, 1995] の第7章 Movements and Insurrections, 1930-

歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓

1941に詳しい。P. Brocheuxは、仏領期メコン・デルタ西部の社会構造に関する研究において欧米の第一人者である。また、この点に関して [Porter, 1976] の第1章 French Colonialism and the Vietnamese Bourgeoisie が優れている。

- 16) [Pearce, 1968] の p.100 と p.155 を比較。
- 17) [Brocheux, 1995, p.202]
- 18) [木村, 1967, p.6] 参照。1950年代, 60年代の南部の土地改革についての状況が分析されている。
- 19) [Pearce, 1968, p.122, p.124]
- 20) [高橋, 1975, p.198] また [Bresford, 1988] も, 1945年から1975年の30年間に, 南ベトナムにおける土地所有の状況は徐々に変化し, その結果, 社会構造は大きく変化していた点を見のがしていない (Ibid., p.56)。
- 21) [出井, 1992, pp.59-60]
- 22) 前掲論文, p.61 参照。南部の農民が集団化を成功させなかった要因として, 出井は, 幹部による農民への強制加入, 合作社管理委員会の請負方式にたいする農民の拒否を挙げている。[Lam Thanh Liem, 1986] は, 1977年から79年にかけて, メコンデルタの土地集団化政策の計画・実施に直接関わったベトナム人インテリによる, 内側からの批判的な記録である。彼は, 2年間の準備期間を経て実施されたハノイ政府の農業改革政策は, ことごとく失敗におわっていたと結論づけている。しかし, M. Bresford は, 戦後の社会構造の変化が見られなかったベトナム中部においては, 統一後の社会主義的改造が受け入れられて成功したと指摘している [Bresford, 1988, pp.61-62]。
- 23) [三尾, 1988, p.35] を参照されたい。
- 24) この「10号決議」に関しては, [出井, 1992] に詳しい。
- 25) [Le Cao Doan, 1995] は, 1988年の農業改革が実施された背景, 過程, 効果についてより概括的に述べている。Doan は, ベトナム農業は今ようやく危機から脱したばかりであること, 将来に向けた脱農業化, および商品生産 (市場経済) への移行のために国家は重大な舵取りをせまられていると論じている (Ibid., pp.123-124)。そこで触れられている集団農業と土地をめぐる問題は, 本稿で報告したメコン・デルタ開拓地の諸例からも正しい示唆であると筆者は思う。

引用文献

Agard, A., *L'Union Indochinoise Française ou Indochine Orientale*, Imprimerie d'Extrême-Orient, 1935.

Beresford, Melanie, *Vietnam, Politics, Economics and Society*, Pinter

Publishers, London, 1988.

Bouault, J., *Geographie de L'Indochine, III, La Cochinchine*, Imprimerie d'Extême-Orient, Hanoi, 1930.

Brocheux, Pierre, *The Mekong Delta: Ecology, Economy, and Revolution, 1860–1960*, University of Wisconsin-Madison, 1995.

出井富美「ベトナム農業の改革と発展戦略」関口末夫，トラン・ヴァン・トゥ編『現代ベトナム経済』所収論文，勁草書房，1992年。

木村哲三郎『ベトナム共和国における土地制度』外務省経済局アジア課，昭和42年。

Lam Thanh Liem, *Collectivisation des Terres: L'Exemple du Delta du Mekong*, SEDES, Paris, 1986.

Le Cao Doan, "Agricultural Reforms in Vietnam in the 1980s," in *Vietnam in a Changing World*, eds. by I. Norlund, C. L. Gates & Vu Cao Dam, Curzon Press, Great Britain, 1995.

Li Tana & Anthony Reid (eds), *Southern Vietnam under the Nguyen: Documents on the Economic History of Cochinchina (Dang Trong), 1602–1777*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore, 1993.

三尾忠志「ベトナムの経済改革：モデルなき実験と試行錯誤」『インドシナをめぐる国際関係——対決と対話』日本国際問題研究所，1988年。

Nguyen Huu Chiem, "Geo-Pedological Study of the Mekong Delta," 『東南アジア研究』京都大学東南アジア研究センター，第31巻2号，1993年

Pearce, Robert Michael, "Land Tenure and Political Authority: The Processes of Change in Land Relations and Land Attitudes in Vietnamese Villages of the Mekong Delta since 1945," dissertation for Doctor of Philosophy (University of Washington), 1968.

Porter, Daniel Gareth, "Imperialism and Social Structure in Twentieth Century Vietnam," a theasis presented to Cornell University for the

degree of Doctor of Philosophy, 1976.

高田洋子「植民地コーチシナの国有地払い下げと水田開発：19世紀末までの土地政策を中心に」津田塾大学『国際関係学研究』No.10, 1984-a.

「20世紀初頭のメコンデルタにおける国有地払い下げと水田開発」京都大学東南アジア研究センター『東南アジア研究』第22巻3号, 1984-b.

「フランス植民地期ベトナムにおける華僑政策——コーチシナを中心に——」千葉敬愛短期大学国際教養科『国際教養学論集』1991年.

「メコン河流域の開発と環境に関する一考察：コーラート高原とメコンデルタの事例を中心に」千葉敬愛短期大学環境情報研究所『環境情報研究』No.2, 1994-a.

「新しい契約：メコン・デルタの開発」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』山川出版社, 1994-b.

“Rice and Colonial Rule: A Study on Tariff Policy of French Indochina, 千葉敬愛短期大学環境情報研究所『環境情報研究』No.3, 1995.

高橋保「メコンデルタにおける土地所有と経済社会開発史」『東南アジア研究』京都大学東南アジア研究センター, 第13巻2号, 1975年.

The Frontier in the Mekong Delta in Historical Perspective:

An Analysis of Recent Development

Based on Field Research in 1995

Yoko Takada

In the Mekong delta, which experienced a new wave of Vietnamese colonization in the 20th century, there remain even today large tracts of fallow land where settlers families are allowed to try their luck and gain some measure of autonomy. Through an analysis of several recent cases of development in the Mekong delta, the writer considers the conditions for agricultural development in this area.

This paper consists of three parts. First, the writer discusses five settlements which were recently created for rice field cultivation in remote areas: (1) U Minh forest in the Camau peninsula, for afforestation and settlement (3 cases), (2) My Lam State farm in Kien Giang province started in 1977, and (3) the frontier region in Dong Thap province. These frontier areas were abandoned under French domination because they were located in broad depressions or floodplain areas often inundated in the rainy season.

Second, each of these cases are inspected in historical perspective, after a general explanation of the history of agriculture in the Mekong delta from 17th century.

Finally, the writer discusses the problems of the present production system in the Mekong delta in view of three fundamental points: technique or capital, land and laborers.